【4】釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」伝承

［0］釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承はパーリ文献には見当たらないが、漢・梵の北伝資料の処々に散在している。摩訶迦葉の諸徳を列挙する中に簡単に「半座」が言及される場合や、どのような状況で釈尊から摩訶迦葉に半座が勧められたかを記述する場合もあり、「半座」は種々の文脈で言及されるため、どのような文脈で言及されているかに留意して分類しながら、資料を紹介し考察する。以下、《　》〈　〉内の数字は【論文８】「摩訶迦葉（Mahākassapa）の研究」に用いられている資料番号である。半座に言及する箇所に下線を付した。

［1］諸比丘が摩訶迦葉をあなどったため、釈尊が摩訶迦葉に半座を与えて彼が自身と同じ禅定を得ていることを称賛する。

（1）『雑阿含経』1142（大正 02　p.302 上）〈12-3〉；爾時世尊知諸比丘心之所念。告摩訶迦葉。<u>善來、迦葉、於此半座</u>。我今竟知。誰先出家。汝耶、我耶。……爾時尊者摩訶迦葉合掌白佛言。世尊。佛是我師。我是弟子。佛告迦葉。如是如是。我爲大師。汝是弟子。汝今且坐。隨其所安。尊者摩訶迦葉稽首佛足。退坐一面。

（2）『別訳雑阿含経』117（大正 02　p.416 下）〈12-4〉；爾時世尊。……遥見迦葉。即語之言。<u>善來、迦葉。尋分半座。命令共坐</u>。我當思惟。汝先出家。我後出家。是故命汝。與爾分座。摩訶迦葉聞斯教已。即懷惶悚。便起合掌。頂禮佛足。白佛言。世尊。是我大師。我是弟子。云何與師同共同坐。第二第三。亦作是言。佛告迦葉。實如汝言。我是汝師。汝是弟子。即命迦葉。汝可於彼所應坐處。於中而坐。時尊者迦葉。即奉佛教。敷座而坐。

（3）『中本起経』「大迦葉始来品」（大正 04　p.161 上）；於是摩訶迦葉。垂髮弊衣。始來詣佛。世尊遙見歎言。<u>善來、迦葉。豫分半床。命令就坐</u>。迦葉進前。頭面作禮。退跪自陳曰。余是如來末行弟子。顧命分坐。不敢承旨。

［1-1］（1）（2）の２経に対応するパーリの経は *SN*. 016-009（vol. II　p.210）〈12-1〉であるが、ここには釈尊が摩訶迦葉に半座を勧めるくだりは言及されておらず、釈尊によって説かれる摩訶迦葉が自身と同じく四禅・四無色定・想受滅・六神通を得ていると称賛する言葉のみが対応している。

釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったという伝承の原型は、おそらくここに見られる伝承であると考えられる。他の伝承はこのような伝承を基にして成立したのであろう。パーリの対応経に言及されないことから、摩訶迦葉に半座を分かったという伝承そのものは我々の資料観からするところの第１次水準資料ではなく、第３次水準資料に属する (1)。

［1-2］ちなみに摩訶迦葉が釈尊の分かった半座に実際に坐ったか、それともそれを辞退したかはあまり明確ではない。多くの資料は釈尊が摩訶迦葉に「半座」を「請」じたとするのみで、実際に坐る場面が記述されていないからである。しかしながら摩訶迦葉がその座に坐ることを辞退したことが明確な伝承も存在する。上記の『雑阿含経』と『別訳雑阿含経』の資料では摩訶迦葉は釈尊の分かった座には坐っていない。

(1)　【論文８】【1】-［3］

［2］トゥッラティッサー（またはトゥッラナンダー）から誹謗を受けた摩訶迦葉が阿難に対して自身が釈尊から受けた称賛を述べる中に、釈尊から半座を分かたれたことが言及される。

（1）『雑阿含経』1143（大正 02　p.302 下）〈13-2〉；如是阿難。世尊如來應等正覺、於無量大衆中、口自説言。善來、摩訶迦葉、請汝半座。

［2-1］『別訳雑阿含経』118（大正 02　p.417 上）〈13-3〉はこの経に内容的に対応しているが、半座には言及していない。パーリでは *SN.* 016-010（vol. II　p.214）が対応しているが、半座への言及はない。

この『雑阿含経』1143 に半座が言及されるのは、『雑阿含経』1142 を前提にしていると考えられる。

［3］摩訶迦葉が結集に際して阿難に四部阿含を後世に残すことを委託するが、阿難は如来が在世に半座を請うた摩訶迦葉こそがその任に堪えると訴える。

（1）『増一阿含経』（大正 02　p.549 下）；如來在世請半坐

（2）『分別功德論』（大正 25　p.031 中）；阿難推先迦葉云、耆年堪任爲衆演法。所以然者。尊長舊學多識世尊所委。爲將來衆生故。欲使正法久存於世。是以如來半坐相命。仁尊既是衆僧上座。又復智慧包博。唯垂慈愍時宣法寶。

［3-1］（1）は『増一阿含経』の序品の記事である。（2）は『増一阿含経』の註釈であり、阿難が摩訶迦葉を推した理由として、摩訶迦葉は尊長・旧学・多識・世尊の委ねる所であり、釈尊が将来の衆生のために正法を世に久しく存せしめようと欲して、半座を命じたほどの衆僧の上座であるから、という。

［4］アショーカ王がウパグプタ長老の勧めで、釈尊の仏塔からはじめて諸仏弟子の塔を供養する。その中、摩訶迦葉の塔のところでウパグプタ長老が摩訶迦葉の諸徳を数え上げる。

（1）『雑阿含経』604（大正 02　161 中）〈12-2〉；（p.168 上）次復示摩訶迦葉塔。語王言。此是摩訶迦葉塔。應當供養。王問曰。彼有何功德。答曰。彼少欲知足。頭陀第一。如來施以半座及僧伽梨衣。愍念衆生興立正法。即説偈曰

功德田第一　愍念貧窮類　著佛僧伽梨
能建於正法　彼有如是德　誰能具宣説

時王捨十萬兩珍寶。供養是塔。以偈讃曰

常樂於寂靜　依止林薮間　少欲知足富　今禮大迦葉

（2）*Divyāvadāna* Kunālāvadāna（Cowell 本　p.395）

yāvat sthaviropaguptaḥ sthaviramahākāśyapasya stūpaṃ kriyatām asyārcanam iti. rājāha. ke tasya guṇā babhūvuḥ. sthavira uvāca. sa hi mahātmā alpecchānāṃ saṃtuṣṭānāṃ dhūtaguṇavādinām agro nirdiṣṭo bhagavatārdhśāsanenopanimantritaḥ śvetacīvareṇācchādito dīnāturagrāhako śāsanasaṃdhārakaś ceti. āha ca. puṇyakṣetram udāraṃ dīnāturagrāhako nirāyāsaḥ. sarvajñacīvaradharaḥ śāsanasaṃdhārako matimān.

kas tasya guror manujo vaktuṃ śakto guṇān niravaṣeśān. āsanavarasya sumatir yasya jino dattavān ardham. tato rājāśokaḥ sthaviramahākāśyapasya stūpe śata-sahasraṃ dattvā kṛtāñjalir uvāca. parvataguhānilayam araṇaṃ vairaparāṅmukhaṃ praśamayuktam santoṣaguṇavivṛddhaṃ vande khalu kāśyapaṃ sthaviram.

ウパグプタ長老が「摩訶迦葉長老のストゥーパを敬ってください」と〔言うと、アショーカ〕王は言った。「彼にはどのような特性があったのですか」。長老が答えた。「彼は偉大で少欲で満足して頭陀行者である者たちの第一人者であると示され、世尊によって半座を提供されました。〔釈尊からいただいた〕輝く（白い？）衣をまとい、貧苦にあえぐ者を摂取し、教説を保つ方でもありました」。さらに言った。「広大な福田、貧苦にあえぐ者の摂取者であり、心持の良い（？）方でありました。一切智者の衣を保持し、教説を保ち、智慧がありました。かの師（迦葉）の徳を全て言い尽くせる人は誰もいません。なぜなら妙なる智慧を有する勝者が最上の座の半分を与えるほどの人でしたから」。それからアショーカ王は摩訶迦葉長老のストゥーパに百千金を施与して、合掌しつつ言った。「山窟に住み、いさかいを離れ、不和に背をむけ、寂静に専心した、知足の徳によって偉大なる迦葉長老を私は敬う」。

(3) 『阿育王伝』（大正 50　p.104 中）；遂復示王迦葉之塔。舉手而言。此是摩訶迦葉之塔。亦應供養。王問言曰。有何功德。尊者答言。少欲知足頭陀第一。如來分坐而與令坐。佛自脱衣以與迦葉。憐愍窮苦護持佛法。今為略説。豈能盡其苦行功德。王以百千両金施迦葉塔。即便合掌而作偈言

坐於山窟　去除鬪諍　無諸忿怒　常行禪定
少欲知足　功德最上　我今頂禮　至心歸命

(4) 『阿育王経』（大正 50　p.138 中）；優波笈多復指示言。此是摩訶迦葉塔應當供養。阿育王問言。其人功德云何。長老答言。於少欲知足乃至八種及頭陀苦行、佛説其人最為第一。佛以半座與其令坐。又以自身袈裟覆之。攝受苦人受持法藏。復説偈言

最勝大福田　行少欲知足　受持佛法藏　能攝苦衆生
佛與其半座　及以衣覆身　無有人能説　其大功德海

時阿育王復以十萬金。供養大迦葉塔。合掌説偈

常在山石窟　具少欲知足　除諸煩惱怨
獲得解脱果　無比功德力　是故今頂禮

これら４資料はすべて対応関係にあり(1)、摩訶迦葉の特性を列挙する中に「半座」が言及される。

(1) 同様の記事が『釈迦譜』（大正 50　p.079 下）に見られる。「次復示摩訶迦葉塔語王言。此是摩訶迦葉禪窟。應當供養。王問曰。彼有何功德德。答曰彼少欲知足頭陀第一。如來施以半座及僧伽梨衣。愍念衆生興立正法。時王捨十萬兩珍寶。供養是塔」

［5］給孤独長者の娘スマーガダーが摩訶迦葉の特性を列挙する。

給孤独長者の娘スマーガダーが、外道の信者である家に嫁ぎ、後に家族を仏教に帰信させて釈尊と仏弟子を家に招く。空中を飛んでやってくる一人一人の仏弟子をスマーガダーが夫に紹介していく中、摩訶迦葉のところで半座が言及される。

(1) 『増一阿含経』（大正 02　p.663 上）〈18-3〉；是時尊者大迦葉、化作五百匹馬皆朱毛尾金銀校飾、在上而坐、並雨天華、往詣彼城。長者遥見以偈問女曰

　金馬朱毛尾　其數有五百　爲是轉輪王　爲是汝師耶

女復以偈報曰

　頭陀行第一　恒愍貧窮者　<u>如來與半坐</u>　最大迦葉是

是時大迦葉遶城三匝、往詣長者家。

(2) *Sumāgadhāvadāna*（岩本裕『『スマーガダー＝アヴァダーナ』研究』　仏教説話研究　第五巻　開明書院　1979 年；付録 I 校訂梵本『スマーガダー＝アヴァダーナ』）

59. atrāntareṇāyuṣmān mahākāśyapaḥ sauvarṇaṃ parvatam abhinirmāya nānā-mṛgagaṇopetaṃ nānāprasravākulaṃ nānāpakṣigaṇākīrṇaṃ nānāvṛkṣopaśobhitaṃ tatropaviṣṭaḥ sa upari vihāyasā ṛddhyākāśenāgacchati.

60. taṃ dṛṣṭvā sumāgadhāyāḥ svāmī sumāgadhāṃ papraccha: sumāgadhe, ayaṃ te sa śāstā yo 'yaṃ suvarṇaṃ parvatam abhiruhyāgacchati.

61. sā kathayati: nāyam āryo mahākāśyapo, 'yaṃ bhagavatā alpecchānāṃ saṃtuṣṭānāṃ dhūtaguṇadharāṇāṃ agro nirdiṣṭaḥ.

62. anenaikonaṃ lāṅgalasahasraṃ lakṣāhatānāṃ, ṣaṣṭihiraṇyakoṭyaḥ sauvarṇā-nāṃ, yavānāṃ aśītibhiḥ khāryaṃ, ṣoḍaśa dāsagrāmam, aṣṭādaśa mahābhakta-grāmāḥ, anekaśatasahasrāṇi vastūny upakaraṇaṃ samutsṛjya pravrajitaḥ.

63. punar aparaṃ: sarvaśrāvakānāṃ samakṣam ayaṃ <u>bhagavatārdhāsaneno-panimantritaḥ</u>

　ekaprasthodanaṃ śreyaḥ ekaśayyā sukhāvahā /

　ekadūṣyayugaṃ vāryaṃ, geho mohaparigrahaḥ //

iti kṛtvāpratigṛhītāśeṣā yā aparigraha iti na gṛhītaḥ. yaś ca bhāgineyām abhirūpāṃ darśanīyāṃ janapadakalyāṇīsadṛśīṃ tām apahāya pravrajitaḥ, sa eṣāgacchati.

59. その時、長老摩訶迦葉が種々の獣の群れが棲み、種々の泉が湧き、種々の鳥の群れが飛びかい、種々の樹々に彩られた黄金の山を化作して、その山の上空に坐り、神通力によって空中を飛んでやって来た。

60. 彼を見て、スマーガダーの夫がスマーガダーに「スマーガダーよ、黄金の山に乗って来られたこの方が、汝の師か」と訊ねた。

61. 彼女は答えた。「いいえ、この方は摩訶迦葉聖者です。世尊はこの方を少欲知足の頭陀行者たちの第一人者であると宣言されました。

62. この方は、刻印を打った 999 本の鋤、黄金六億金と、大麦 80 カーリーと、16 の奴隷村と 18 の大きな食糧村と、幾百千の高価な物と資具とを捨てて出家しました」。

63. さらにまた、「すべての声聞たちの眼前でこの方は<u>世尊から座席の半分を提供されました</u>。

　『1 プラスタの粥で十分、一寝床が安眠をもたらし、一対の衣が宝である。家は迷いの住処』

と考えて、受け取らなかったものはすべて、『〔これは〕受け取ったものではない』

といって取りませんでした。国中で第一の美女にも似た可愛らしくて美しく見目麗しい女を捨てて出家した方が来られたのです」。

(3)『須摩提女経』（大正 02　p.841 上）；是時尊者大迦葉、化作五百匹馬皆朱毛尾金銀交飾、在上坐、並雨天華、往詣彼城。長者遥見已以偈問女曰

　金馬朱毛尾　其數有五百　爲是轉輪王　爲是汝師耶

女復以偈報曰

　頭陀行第一　恒愍貧窮者　<u>如來與半坐</u>　最大迦葉是

是時大迦葉繞城三匝往詣長者家。

(4)『給孤長者女得度因縁経』（大正 02　p.847 下）；復次尊者大迦葉、化大金山、其色晃耀。復有種種樹林飛鳥周匝圍繞。而此尊者處于山頂現是神通。從空而來三繞彼城。次從空下入長者舍。爾時長者見是相已、問善無毒女言。今此所來處金山頂、現如是相入此舍者、是汝師邪。女即答言。此非我師。是佛弟子名大迦葉。此人未出家時其家大富、金銀珍寶其數無量、有百千種上妙衣服、眷屬熾盛人所瞻敬。此人厭捨如是富貴等事、出家修道而獲果證。又此尊者常止一處、常持一衣少欲知足。而能攝餘貪愛衆生。又此尊者、<u>佛於一時分半座令坐</u>。佛説此人修頭陀行中最爲第一。是此尊者次第而來。

［6］釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったことの因縁を前生に求めるものとして以下のものがある。

(1)『中本起経』「大迦葉始来品」（大正 04　p.161 上）；【1】－［1-2］－(14) 参照。

(2)『衆経撰雑譬喩』（大正 04　p.542 中）；帝釈天が梵天と組んで人々を教化する。帝釈天は人間がみな悪道に落ちてしまって天界に昇って来ないために天界の人口が減ることを憂える。帝釈天は人間界に行って獅子になり、梵天はバラモンになる。獅子が人を喰らうと言って人々を恐れさせると、バラモンが王に進言して死刑囚を犠牲にさせる。獅子は死刑囚を連れて深山中に行くが彼らを食べずに五戒・十善道を教える。このようにして八万諸国を教化して天界の人口が増える。この時の帝釈天は釈尊の前生で、バラモンは摩訶迦葉の前生である。摩訶迦葉の前生である梵天の助けで釈尊は仏果を得た。<u>この時の恩に報いるために並坐させた</u>（趣意）。

［7］釈尊が摩訶迦葉に半座を分かった理由について４説を挙げるものがある。

(1)『尊婆須蜜菩薩所集論』（大正 28　p.762 上）；是謂、彼時<u>以何等世尊請摩訶迦葉與半座坐</u>。

　①或作是説。時諸比丘輕易迦葉起染汚心、不知迦葉入大法要。以是故<u>世尊與半座坐</u>。欲使比丘心開意解。懼獲不善報。

　②或作是説。彼尊者有種種功德。世尊先所化。恐諸比丘犯禁戒罪。

　③或作是説。第一尊重尊者阿那律。世尊往視依衣。更<u>請摩訶迦葉與半座</u>。

　④或作是説。世尊欲付授戒律。後來衆生信受其言。

［7-1］①は［1］の『雑阿含経』1142、『別訳雑阿含経』117 の記事に対応する。諸比丘が摩訶迦葉を軽んじて悪報を受けることがないようにした、②は釈尊に先に教化されて法臘が上である摩訶迦葉を、法臘が下の諸比丘が軽んじて犯戒することがないようにした、③

は摩訶迦葉がぼろぼろの衣をつけて現れたために、本来摩訶迦葉よりも尊重されてはならない阿那律が第一に尊重されているのを釈尊が見て、半座を分かつことで摩訶迦葉が第一に尊重されるようにした、④は〔摩訶迦葉に？〕戒と律を授けて後来の衆生が摩訶迦葉の言葉を信受するようにした、という意であろう。

［8］その他、上の分類のどれにも属さないものを紹介しておく。

(1)『大荘厳論経』（大正04　p.310中）；復次有大功徳猶修無倦。況無福者而當懈慢。我昔曾聞。尊者摩訶迦葉、入諸禪定解脱三昧。欲使修福衆生下善種子獲福無量。於其晨朝著佛所與僧伽梨衣、而往乞食。時有覩者。即説偈言

　讃歎彼勝者　著於如來衣　人天八部前　佛分座令坐

(2)『華手経』（大正16　p.127中）；爾時世尊遙命之曰。善來、迦葉、久乃相見。汝當就此如來半坐。佛移身時、大千世界六種震動、有大光明遍照世界、大音普聞如擊金鍾。摩訶迦葉偏袒右肩、右膝著地長跪合掌白世尊曰。佛是大師。我爲弟子。佛之所有衣鉢坐處。爲弟子法不應受用。……

（p.128上）我於帝釋石室中住。承世尊命故來到此。欲於佛法請質所疑。而今如來顧命分坐。大千世界六種震動。我即惟曰如來希有。成就甚深清淨大法。自然無師成無上道。住大慈悲摧躁憍慢幢。今乃顧命弟子分坐。如貧賤人以尊敬心見轉輪王。時轉輪王命之共坐。是貧賤人生希有心。我見聖王尚以爲難。況復得與分床共坐。佛亦如是。一切智人有大威德。法王無師自然逮覺。一切聲聞及辟支佛無能勝者。況餘世間一切天人阿修羅等。我今得見親近諮請已爲大利。況乃見命分床共坐。甚爲希有。我作是念、如來深具大慈大悲大喜大捨。不自矜高。我爲最尊世間中上。如來功德而自顯現。是名不與一切聲聞辟支佛共。

(3)『大法鼓経』（大正09　p.291下）；迦葉白佛。唯願、世尊、説大法鼓經、擊大法鼓吹大法荅螯。佛言。善哉善哉、迦葉、汝今聽説大法鼓經。迦葉白佛言。唯然、受教。何以故。是我境界故。是故如來大見敬待。云何爲敬。曾告我言。汝來共坐。以是因縁我應知恩。佛言。善哉、迦葉。以是義故。我敬待汝。迦葉、譬如波斯匿王、善養四兵。若鬪戰時擊大戰鼓、吹大戰荅螯、對敵堅住。縁斯恩養、戰無遺力、能勝怨敵、國境安寧。如是比丘。我般涅槃後、摩訶迦葉當護持此大法鼓經。以是義故。我分半坐。是故彼當行我所行。於我滅後、堪任廣宣大法鼓經。迦葉白佛言。……

（p.298中）迦葉白佛言。善哉善哉、世尊、我自惟省。今始出家受具足戒、得比丘分成阿羅漢。當於如來知恩報恩。以如來昔日、分我半坐。今日復於四大衆中、以大乘法水而潅我頂。

(4)『迦葉赴仏般涅槃経』（大正12　p.1115中）；昔佛在世時、摩訶迦葉於諸比丘中最長年高才明智慧。其身亦有金色相好。佛毎説法、常與其對坐。人民見之或呼爲佛師。於是迦葉乃辭佛到伊篩梨山中。一山名普能。

(5)『大智度論』（大正25　p.354下）；問曰。五千比丘中上有千餘上座。所謂需漚樓頻螺迦葉等。何以止説此四人名。答曰。是四比丘是現世無量福田。舍利弗是佛右面弟子。目揵連是佛左面弟子。須菩提修無諍定行空第一。摩訶迦葉行十二頭陀第一。世尊施衣分坐常深心憐愍衆生。